

KALS NEWSLETTER 64

2022年2月
九州アメリカ文学会
事務局 九州大学大学院言語文化研究院内
福岡市西区元岡 744
〒819-0395

記憶のなかを歩く

長岡 真吾 (福岡女子大学)

九州に赴任して早くも五巡目の年度が終わろうとしている。振り返ってみれば、という退屈な話は避けたいのだが、それでも二年目の2018年12月に、日本のアメリカ先住民研究を雷神のごとく牽引してこられた故阿部珠理先生に福岡でお会いしたことは強い印象として残っている。その年の多民族研究学会の全国大会を福岡女子大学で開催することとなり、立教大学を退職されてちょうど出身の福岡に戻っていらした阿部先生にこれ幸いとばかり講演をお願いしたのである。当日お目にかかった際に、いやあ、どうして長岡さんが九州にねえ、いや、どうして福岡にねえ、としきりに訝しんでいらっしゃったのをよく覚えている。いえ、ご縁があつて、などと照れ隠しに口ごもったものの、そのうちじっくりお話ししようと機会をうかがっていたら、驚いたことに翌年の3月に逝去された。阿部先生にはお痩せになったなと相変わらずパワフルな講演に引き込まれながらも一抹の不安は覚えていたが、本当に思いも寄らぬことだった。上げた手をどこに下ろしてよいのかもわからなかった。立教に移られる前の福岡の香蘭女子短期大学が大学教員として最初の就職先であり、YouTubeに上がった最終講義でそのことをユーモア混じりに力説される阿部節全開が今も可笑しく、嬉しい。

なぜ九州に、なぜ福岡に、という阿部先生の質問には依然答えに窮するが、赴任する前からなんらかの縁はあったように思う。20 歳くらいに生まれて初めてできた恋人が佐賀にいたことが実際には最初の縁かもしれないが、ここでは故平井昭徳さんと故伊鹿倉誠さんのことを挙げておきたい。平井（と昔のままの呼び名で書くけれど）は島根大学の法文学部でともに学んだ同級生であった。色白で眉毛が太く、小柄だけれど筋肉質で俊敏な平井は、合気道と英語学とに打ち込んで言動もいつもしなやかに引き締まっていた。真吾のいうことは一見面白いけど中身があまりないよね、と悪意なしに言われてずっとそっと考え込んだ。市内での彼の引っ越しを軽トラを運転しながら手伝ったこともある。丸一日ふたりで働いて不思議とすべてが楽しかった。夕暮れのはにかんだ笑顔と礼を言う声が今も鮮明に蘇る。平井は九州大学大学院に進学し、修了後の初任先が筑紫女学園短期大学で、その後島根大学に戻る。されど 2003 年 6 月に突然に近いかたちで病没する。享年 41 歳。2005 年には大学院の同期である西岡宣明先生らが追悼論集を出版された。

その平井と大学院で重なり、やがて島根大学で同僚となるアメリカ文学研究者が伊鹿倉誠さんである。平井がいなくなった地元に遅れて戻った長岡はそこで伊鹿倉さんと同僚になる。伊鹿倉さんといえばまずその研究室の特異なまでの美しさを言わずにはいられない。均整のとれた実用性という伊鹿倉美学が、書架のペーパーバックがそれぞれのサイズに合わせて手製の厚紙ハードケースに一冊ずつ収められて綺麗に並べられていたり、会議や学生に関する資料が見事にファイリングされていたりするところなど、あらゆる細部に具現されていた。その美学は気遣いの仕方にも現れて、長岡がある人事案件で醜態をさらしたときにも、後でそっとドアをノックして、こちらの混乱を丁寧に整理し、分類し、対処可能な順序に並び替えてくれるのだった。二年弱の比較的穏やかと思われた闘病期間が過ぎた 2013 年 7 月、誰も予測しなかった夜に亡くなった。福岡に来た長岡が独りで過ごしていたら伊鹿倉さんと同窓の高橋勤先生と江頭理江先生が偲ぶ会を提案され、生前の伊鹿倉誠の写真をコンピュータ画面いっぱいに映して「4 人」で同じテーブルを囲んだ。今はどう成長されてるかわからないが、伊鹿倉さんのお宅に伺った際に、玄関でひょいと顔を出してくれた息子

さんのひとりがまるで生き写しで、本人が出迎えてくれたかのようで声も出なかった、というような話もさせてもらった。

どうして縁もゆかりもない九州に来たのか、と問われることもないわけではないが、こうして文章にして思い返さずとも、高校への出前講義などで福岡県内はじめ各地に出向いていくときや、自宅に近い箱崎を通るときに、知らず阿部先生や平井や伊鹿倉さんがかつて歩いたその道を自分も歩いているのではと、ふと気付かされることがある。ちょっと立ちどまって、風景を見回してみる。文学研究にしても、ひとの記憶のなかを歩いていくことがその基盤にあるように思う。そのような想像力によるコミュニケーションは、いろいろな境界を越えて、案外年を取らずに続いていくものである。

地区だより

《沖縄地区》

加瀬 保子（琉球大学）

沖縄地区会員の最近の研究活動について、琉球大の加瀬が以下ご報告させていただきます。

沖縄国際大学の追立祐嗣先生は3冊目のご単著『アメリカ黒人文学と現代沖縄文学を読む』を1月に大阪教育図書より出版なされることとなりました。追立先生はアメリカ黒人文学を中心にご研究され、沖縄国際大学総合文化学部英米言語文化学科で長く教鞭をとってこられましたが、今年度末をもちまして定年でご退官されることとなっております。追立先生のこれまでの真摯な研究・教育活動に敬意を表するとともに、この春からの更なるご活躍をお祈りいたします。

名桜大学の山里勝己先生は創刊編集委員を務められた *ISLE: Interdisciplinary Studies in Literature and Environment* (ASLE-USA, Oxford UP) の Editorial Advisory Board の任期を2020年に終えられ、琉球大学の喜納育江先生は *American Quarterly* (ASA) の managing editor の3年間の任期を昨年5月で終えられました。重責、お疲れ様でございました。また、お二人の論文が、最近ハワイ

大学より出版されました論文集 *Unpredictable Agents: The Making of Japan's Americanists during the Cold War and Beyond* に収録されておりますのでこちらも合わせてご報告いたします。この論文集にはアメリカとどのような関わりを経てアメリカ研究者になったかというプロセスを Narrative Scholarship のスタイルで語った 12 の論考が収められております。お二人を含め三人の沖縄出身の研究者の論文は、日本の他地域とは異なったアメリカとの関係性を持つ沖縄におけるアメリカ研究のあり方について示唆する内容になっております。喜納先生は、他にも MLA より出版された *Approaches to Teaching the Works of Karen Tei Yamashita* という論文集にも論文が収録され、大変精力的にご活躍されておられます。

最後に私自身の活動ですが、年明けに行われました MLA 年次大会にて、“The Neuro humanities: The Synaptic Self and Corporeal Literary Studies”というセッションを主宰し、“Ethics of Remembering: Memory Reconsolidation and Trauma”というタイトルで発表をいたしました。このセッションにはミネソタ大学の脳科学者を発表者として招くとともに、脳科学に詳しい人文学系研究者二人にも発表者として加わっていただきました。オーディエンスも活発にディスカッションに加わり、大変実り多いセッションでした。

《鹿児島地区》

千代田 夏夫（鹿児島大学）

鹿児島地区からお便り申し上げます。森孝晴先生（鹿児島国際大学）からはいつもどおりご活躍のご様子をお便りいただきました。ご了承を得て以下に転載させていただきます。

.....

2021 年 9 月 4 日（土）の午後に Zoom 会議の形で九州アメリカ文学会の 9 月例会が開催され、私は 3 番目の発表の司会を行いました。発表は山口大学の藤原まみ先生による「Jack London と仲田由松」でした。新資料の発見ということで興味深い発表でした。昨年 9 月には、ジャック・ロン

ドンの知人だった薩摩藩英国留學生長沢鼎とカリフォルニアで日本人会の会長をしていた牛島謹爾の関係を明らかにした論文「ワイン王とポテト王―長沢鼎と牛島謹爾」が『鹿児島国際大学国際文学部論集』第22巻第2号に掲載されました。なお、同巻同号には私と教え子でバーミンガム大学大学院生の戸川聖也氏の共訳「ペキン・ロードを越えて鴨緑江へ」（ジャック・ロンドン著）も掲載されています。また、11月には研究ノート「長沢鼎と伊地知家」が同論集の第22巻第3号に掲載されました。

・・・・・・・・

Zoom時代にあって筆者の所属する日本F. スコット・フィッツジェラルド協会でも、Kirk Curnutt氏（トロイ大学教授）やStu Wilson氏（NPO Fitzgerald in St. Paul 元責任者）などに特別講演を賜うことが出来ました。恩恵に感謝しつつ、KALS会員の皆さまにお目にかかれまします日を念じております。御からだお大切にお過ごしください。

《熊本地区》

楠元 実子（熊本高専）

熊本もコロナ禍はよくなったり、悪くなったりですが、熊本アメリカ文学研究会は以前通り、2-3か月に1回の頻度でZoomと対面のハイブリッド開催で活動しています。レジュメを前日に配布したり、発表の場で検索した文書を提示したり、動画を見せたりなど、以前にはなかったデジタルの便利さも享受しております。さて、そんな熊本アメリカ文学研究会の前回以降の活動を報告致します。

○第154回（2021年9月18日）Zoom/熊本大学にて

題 目： Sandra Cisneros とコミュニティ

発表者： 楠元 実子

司会者： 池田 志郎

*シスネロスはチカネックスの女性作家で、作品に描かれている自己とコミュニティの意識の変遷、発表者がUTで調査したシスネロス自身の家の意識を検討しました。中西部の共同体意識と自己意識の多様性から始まって、対話、母娘関係、Native American に似た世界観についての発表になりました。他の絵本との類似性、年配になると自然との調和を感じやすいなど、子育て世代からシニアまで多様な背景を持った様々な意見が、日本のこの研究会でも楽しみました。

○第155回（2021年12月4日）Zoom/熊本大学にて

題 目： Lee Israel 著 *Can You Ever Forgive Me?* について

発表者： 角田 俊治

司会者： 池田 志郎

*リー・イスラエルの自伝的な作品、彼女が偽造した手紙、映画版の『ある女流作家の罪と罰』のDVDを読んだり視聴したりしてから参加しました。難しい単語が散りばめれてる作品について分かりやすい解説がなされ、作品内の表現や元ネタ、映画との比較、実体験を元にした作家が行きついた境地についてご発表されました。有名人の手紙を偽造してお金を稼いだ主人公/作家の人間らしさ、ふてぶてしさへの理解が深まり、今はなかなか行けないニューヨークにも思いをはせた会でした。

なお、次回(2/19 予定)はスタインベックの *Burning Bright* についての発表が予定されています。

ご関心がある方は、メールにて楠元 (kusumoto@kumamoto-nct.ac.jp) までご連絡ください。

《佐賀地区》

鈴木 繁 (佐賀大学)

佐賀地区では昨春、佐賀大学の早瀬博範先生がご退職になりました。その結果、佐賀大学に在籍する九州アメリカ文学会の会員は、名本達也先生と私の残り二名となりました。今後、アメリカ文学の教員が補充される見込みはまったくありません。文学関係の教員としては、あとはイギリス文

学の教員が一人いるだけです。おまけに、その年齢たるや、50代後半が一人、限りなく還暦に近い50代が一人、還暦超えが一人というありさまで、絶滅危惧種に指定されかねない状況です。ほんの数年前まで佐賀大学で九州アメリカ文学会の事務局を担っていたなど、夢のような話で、そのような日が訪れることは二度となかろうかと思います。

このような現状において、佐賀地区から九州アメリカ文学会に対し、いかなる貢献ができるか、模索している最中です。そのささやかな実践として、久しぶりに「地区便り」を送らせていただきます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

《北九州地区》

齊藤 園子（北九州市立大学）

北九州地区の活動をご報告します。

まず北九州アメリカ文学研究会の活動です。今回は、研究会の薬師寺元子先生より次のお便りを頂戴いたしました。

「北九州アメリカ文学研究会」は、2021年11月13日（土）に第9回講演会を開催致しました。高橋勤先生を講師としてお迎え致しました。北九州市の採用試験の為、北九州市立大学の教室が使用できず「北九州国際会議場」で午後2時から午後4時50分迄の実施の運びとなりました。

演題は「ホーソン文学の魅力」、司会は村田希巳子先生、勉強会形式で高橋勤先生のご解説の後、フロアーの皆さんと高橋先生の質疑応答で進行致しました。約3時間の長時間ではございましたが、活発な質問やコメントが続出しました。高橋先生の興味深く、丁寧なご解説によりホーソン作品の詩的で美しい文体の中に、人間の奥深い真理が見事に描き出されていることを学ぶことが出来ました。心惹かれるご説明や映像に“Time flies like an arrow”でございました。コロナ禍にもかかわらず、20名もの会員の参加で、是迄になく充実した特別講演会になりました。

つきましてはコロナ禍の為、衛生的な会場確保に苦労しましたこと、10回にも渡る事前の勉強会でホーソンの短編5作に取り組みましたこと、乗口眞一郎先生が貴重なご助言を下さり、会員が一致団結できましたことに感謝でございます。

齊藤からは、日本ヘンリー・ジェイムズ協会第1回年次大会のご報告と北九州市立大学におけるSDGs関連の取り組みのご紹介です。ジェイムズ協会は10年近くの研究会としての活動を経て、4

月 15 日（ジェイムズの誕生日）に立ち上がりました。第 4 回と第 7 回の研究会は九州で開催されています。その協会の第 1 回年次大会が 8 月末にオンラインで開催されました。二日目には米国ノースカロライナ大学チャペルヒル校より、Jane Thraikill 先生が参加されました。Thraikill 先生は鹿児島大学の日本アメリカ文学会全国大会でも登壇されましたので、KALS 会員の方々にも直接ご存じの方が多いかもしれません。年次大会の情報は KALS メーリングリストでも共有させていただきました。ありがとうございました。

また北九州市は「SDGs 未来都市」として SDGs に関わる取り組みを推進しています。北九州市立大学においても様々な取り組みが進められていますが、齊藤の方では特に SDG5（Gender Equality：ジェンダー平等を実現しよう）に関わる取り組みを、学長選考型研究費により、学内の教員や学生と推進中です。頼もしい学生も多く、これからが楽しみです。また本取り組みの一環で、11 月 4 日（木）に、舌津智之先生（立教大学）のご参加を得て、ご講演会「歌謡曲とジェンダー——日米比較文化の視点から——」と意見交換会を開催いたしました。ご講演はアクティビティをまじえながら進められ、楽しく洞察にあふれたご講話に、多くの学生が刺激を受けたようです。

なお、来る 3 月 26 日（土）に日本ナサニエル・ホーソーン協会九州支部にて、オンラインによるシンポジウムを開催予定です。合わせてご案内申し上げます。

事務局からのお知らせ

永川 とも子（九州大学）

(1) 九州アメリカ文学賞応募

九州アメリカ文学賞（新人賞）への応募をお待ちしています。今回より、電子メールによる応募のみの受付となりました。以下の宛先まで原稿をお送りいただきますようお願いいたします。

締切：2022 年 2 月 20 日

提出先：銅堂恵美子（福岡大学）emikododo@fukuoka-u.ac.jp

応募の際は件名欄に、「九州アメリカ文学賞論文応募」と明記して下さい。応募の詳細にしましては、以下のリンクをご覧ください。<http://www.kyushu-als.org/news/article/30>

(2) 『九州アメリカ文学』への投稿募集

『九州アメリカ文学』63号への投稿を募集しています。

締切：2022年4月末日

提出先：九州支部事務局 tmknagakawa@flc.kyushu-u.ac.jp

投稿規定につきましては、以下のリンクをご参照ください。

<http://www.kyushu-als.org/submission>

(3) 九州アメリカ文学会第67回大会発表者募集

九州アメリカ文学会第67回大会は、以下のとおり開催いたします。

日時：2022年5月14日（土）

会場：九州大学伊都キャンパス（オンラインに変更もあり）

特別講演：諏訪部浩一先生（東京大学、アメリカ文学会東京支部長）

シンポジウム：「アメリカ文学と民族」（仮） 司会 長岡真吾先生（福岡女子大学）

下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふるってご応募ください。

締切：2022年2月末日

提出先：高野泰志（九州大学）takano@lit.kyushu-u.ac.jp

レジュメの様式：日本文の場合500-800字程度とし、数行の英語の要旨または数語のキーワードを文末に付加すること。英文の場合は300語程度。作家名と書名は原則として原語綴りに統一。

(4) 日本アメリカ文学会第61回全国大会発表者募集

日本アメリカ文学会の第 61 回全国大会（2022 年 10 月 8 日、9 日、於：専修大学）にて研究発表を希望される方は、以下の要領でレジュメを提出ください。

締切：2022 年 3 月末日

提出先：九州支部事務局 tmknagakawa@flc.kyushu-u.ac.jp

提出物：発表レジュメ、略歴（名前、所属、住所、電話番号）

レジュメの様式：A4 判横書 1,200 字程度（英文の場合は 400 語程度）です。なおタイトルと氏名は英語表記を必ず併記のうえ、作家名と書名は原則として原語綴りに統一。

編集後記

九州大学大学院の同級生であった伊鹿倉さん、1 年後輩であった平井さんのことを、最近特に思い出します。もっと本を読みたかったであろう、もっと研究を重ねたかったであろう、もっとご家族と過ごしたかったであろう、そのような思いに至ります。オミクロン株の感染拡大で先が見えない状況下、今自分がなすべきことは何であるかについて、改めて考える機会をいただきました。

長岡先生、ご寄稿ありがとうございました。地区委員、事務局の皆様にもお礼申し上げます。

ニュースレター担当 江頭 理江 （福岡教育大学）